関連学会印象記

第55回日本心臓病学会

村　上　　淳*

平成19年9月10日から13日に千葉県浦安市で開催された第55回日本心臓病学会（会長　齊藤 穎 日本大学医学部）に参加する機会を得た．9月9日，10日に開催された日本心不全学会とともに，東京ディズニーリゾートに隣接するシェラトン・グランド・トーキョーベイ・ホテル，東京ベイホテル東急が会場となった（**図1**）（心不全学会はその間にあるヒルトン東京ベイで開催された）．ディズニー

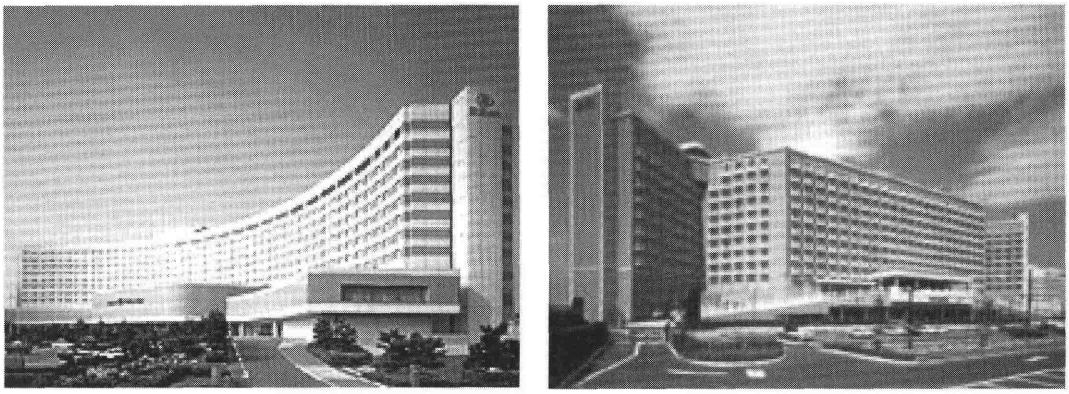

図1　会場となったシェラトン・グランド・トーキョーベイ・ホテルと東京ベイホテル東急

図2　ディズニーリゾートクルーザーと東京ベイホテル東急

*群馬県立心臓血管センター循環器内科

Presented by Medical*Online

ランドを横目でみながらシャトルバスで2つの会場を行き来した．学会のシャトルバスの間は，ディズニーリゾートのシャトルバスである「ディズニーリゾートクルーザー」も利用して移動した(**図2**)．9月下旬まで続いた今年の猛暑の中で，今回の学会期間中はあいにくの曇り時々雨の天候であったが，むしろ勉強に専念できるといいきかせて学会に臨んだ．

テーマは「臨床心臓病学のNew Paradigm－未来医療へのチャレンジと社会への貢献－」であり，シンポジウムには心臓移植の現状と将来展望，重症心不全の治療戦略や再生医療など最先端先進医療について発表があった．その他，虚血性心疾患，不整脈，画像，心不全，心血管危険因子，コメディカルセッションなど多岐に渡る演題が用意されていた．どのように聞いて回るか計画を立てることもひとつの楽しみかもしれない．ただ，筆者が現在日常臨床で中心的に行っている運動負荷・リハビリセッションに関して，少ないセッション数のなかで口演とポスターの時間が重なっていたのは残念であった．自分の発表のセッション内では，トレッドミル運動負荷試験時のインピーダンス式心拍出量計による連続的心拍出量モニタリング使用が，心室内伝導障害や心肥大などで診断が困難である症例に対して有用であったという発表は興味深かった．今後はさらに狭窄部位による違いも検討する予定のようであった．

今回特に興味を持って聞かせていただいたのは心血管エコーのセッションであった．現在の話題としては左室機能と左室局所の心機能をどう評価するか，どのような方法で評価していくかということのようである．ストレイン，Speckle Trackingの進歩，torsionをどうとらえていくか，また，Dyssynchronyの評価も心エコーの重要な仕事のひとつである．ランチョンセミナーにおいても，心機能評価法として，2D Speckle Trackingをとりあげていた．このspeckle trackingを用いることによってtranslationやtetheringの影響，角度依存を受けずに局所心筋の収縮・拡張能が評価できる．それを応用したストレインは局所の左室壁厚変化・変化率を定量的に捉えることが可能であり，冠動脈支配に従った心筋障害の検出に適している．今後どのように発展させていくか，各機械メーカーの主張もあり楽しみな分野である．

教育講演でも循環器内科としては経験の浅い自分としては興味を引かれる演題が多数並んでいたが，時間の都合もありACE阻害薬とARBの使い分け，うっ血性心不全に対するβ遮断薬の使い方，拡張機能の評価の3演題を聞かせていただいた．まだ臨床試験や解析が進行中であったり，研究の発展段階であったりするものもあるが，それぞれ第一線で診療を行っている先生方からの話に触れることができ，次の日からでも診療に生かせそうな内容であった．

また，米国合同委員会第7次報告(JNC-7)で打ち出されたPre-hypertension(前高血圧)に関する日本人での研究では，肥満，冠動脈危険因子の集積による血管内皮機能低下や血管リモデリングの発生が重要な危険因子であることや，急性冠症候群を発症した前高血圧患者とインスリン抵抗性との関連を発表していた．成人の多くが高血圧に罹患しており，高齢者での医療費に対する割合も多い．様々な合併症の要因ともなっており，高血圧の一時予防も含めて今後の重要課題のひとつと思われた．

本学会は春に行われる日本循環器学会総会と2大循環器系学会である．最近の研究成果を発表をしたり，最新の循環器領域の講演を聴いたりする大きな場として今後のさらなる発展が期待される．

Presented by Medical*Online